



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

研究ノート 社会空間の感性的質について（４） ：沖縄の「自治の感覚」

著者	宮原 浩二郎
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	133
ページ	109-120
発行年	2020-03-12
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028551

〈研究ノート〉

社会空間の感性的質について (4)*

——沖縄の「自治の感覚」——

宮 原 浩 二 郎**

はじめに—社会空間の雰囲気への着目

社会空間のもつ感性的質 (aesthetic quality) を知ろうとすれば、私たちは自らその空間に身をおき、自分自身がその場の状況や雰囲気に巻き込まれていることが必要になる¹⁾。日常生活者というまでもなく、研究者の場合でも、社会空間の感性的質の探知器はあくまでも一人一人の身体そのものである。物理的な人工空間や文化的空間であれ、ミクロな相互行為状況であれ、その雰囲気が認識されるのは、個々の身体を通じて直接に見られ聞かれ、肌で感じとられ、あじわわれるときに限られる。ここには、社会空間への外側から距離をとった観察ではなく、A. バリエーションのいう内側に巻き込まれながらの「感性的関与」(aesthetic engagement) が働いている (Saito 2017)。

ここで「感性的質」は「雰囲気」と言い換えることができる²⁾。社会空間の雰囲気の研究では、一人一人が直接に体感可能な小さな場の探究が発点になる。とはいえ、探究の対象は「その時・その場」だけの空間に限定される必要はなく、一定の歴史的・地理的な広がりをもつ社会空間へと伸びていく。なぜなら、社会空間への感性的関与は誰もがそうと自覚せずに行っている日常的活動であり、それを自覚化すれば、身一つでくり返し行えるフィールド参加になるからである。そうし

たフィールド参加を時間や空間をずらしながらくり返すことで、歴史的・地理的に広がりのある社会空間の雰囲気を捉えることが期待できるだろう。たとえば、ジンメル「社会学的印象主義」(Frisby 1981) は「社交の場」や「大都会」に特有の雰囲気を浮かび上がらせたが、それを可能にしたのはジンメル自身による豊富なフィールド参加と感性的関与である。いいかえれば、「その時・その場」のミクロな感性的関与でも、時間や空間をずらした反復や積み重ねを通して、一定の歴史的・地理的な広がりをもつ社会の認識が可能になるはずである。

社会空間の雰囲気に着目した社会学的研究として、商店街、居酒屋、商工会館などが取り上げられてきた (宮原・藤阪 2012; Miyahara 2014; 藤阪 2018)。また、現象学的な雰囲気研究として、小学校の教室、アート・イベント、ショッピング・モールなどをめぐる研究も報告されている (木下 2017; McNally 2015; Böhme 2017)。これらの研究で取り上げられるのは、場の全体を一挙に体感できる小さな社会空間である。しかし、感性的関与の積み重ねによって、より大きな地理的・歴史的広がりを対象にしてその雰囲気を問題にすることも可能なはずである。その場合、どのようなアプローチが考えられるだろうか。以下では、沖縄社会の雰囲気や肌ざわりをめぐる記述・考察を取り上げながら、その社会学的研究としての可能

*キーワード：雰囲気、自治の感覚、沖縄、社会解体

**関西学院大学社会学部教授

1) 「社会空間」には街路や建築物や各種施設などの社会環境だけでなく、人びとの相互行為状況が含まれている。それはさまざまな人工物 (artifact) からなる物理的空間であるとともに、人びとが何らかのやりとりをするコミュニケーション空間でもある。

2) 「感性的質」は「雰囲気」とほぼ同義である。ただ、「感性的質」という概念には広く美学・感性論 (aesthetics) の課題や概念との関連性を明示できる利点がある。

性と課題を考えてみたい。

1 沖縄を歩く—紀行文から

現代では、どのような社会空間もメディアを介したイメージと言説に覆われている。とりわけ沖縄は「南の島の楽園」「古代的な精神世界」「戦争と基地の島」といった観光的・文化的・政治的イメージと言説によって濃厚に包まれている。沖縄に一度も行ったことのない人でも、沖縄社会について多くのことを「知っている」気にさせられてしまうのが現実である。その意味で、沖縄はイメージと言説を通じた知識が実体験による知識をはるかに凌駕してしまった地域の典型だろう。実際、観光客の多くは事前に慣れ親しんだ「沖縄」イメージを確認することで満足し、そのまま帰途に就く。

しかし、沖縄についてよりよく「知る」ためには、日々流されてくるイメージと言説をカッコに入れて、まずは現地の社会空間の雰囲気を感じとりとる必要がある。少なくとも、それを直接に感じ取った人の言葉や文章を介して、間接的な形で肌で感じとる必要があるだろう。ここで興味深いのは、観光や仕事で沖縄を訪れた人びとのなかには、路上や食堂や宿泊所での何気ない体験を通じて、あらためて沖縄の社会や文化に興味関心を抱く人も少なくないという事実である。経験豊かなリピーターが目立つのも沖縄観光の特徴であり、彼らの多くはたんなるイメージ消費にあきたらず、ごく日常的な生活の場のリズムや雰囲気に惹かれて滞在する。沖縄の魅力にとりつかれ、休暇ごとの頻繁な旅行、さらには移住まで考えるようになる「沖縄病」もよく知られている。これは沖縄のもつ吸引力が「青い海」「亜熱帯の自然」「伝統芸能」「歴史・平和学習」などの観光資源だけでなく、現地での日常的な社会生活そのものにあることを示している。

ここで注目したいのは、沖縄の隅々を歩きまわりながら、食べ飲み、見聞きし、その場で感じたことを書き記した紀行文である。それは観光ガイドブックの枠をはみ出し、「沖縄を歩く」体験に徹底的にこだわる現地レポートでもある。著者のカベルナリア吉田は、長年のバックパッカー旅行

を通して、沖縄本島をはじめ宮古・八重山、周辺の離島をくりかえし歩いてきた。『ひたすら歩いた 沖縄みちばた紀行』（2009）、『沖縄の島へ全部行ってみたサー』（2010）、『さらにひたすら歩いた 沖縄みちばた紀行』（2013）、『何度行っても変わらない沖縄』（2018）などの著書がある。タイトルからもわかるように、その多くは定番の観光地、歴史名所や社会的ランドマークではない、ただの街角や路地や農道を「ひたすら歩いた」体験レポートである。

たとえば、那覇おもしろまちの天久新都心を歩く。米軍基地の跡地に、巨大なショッピング・モールや県立博物館、政府機関やオフィス・ビルが整然と配置されている。最新の建築や空間デザインは現代都市そのものであり、沖縄のなかでもっとも「沖縄らしくない」空間でもある。吉田はこの新区画を一通り歩いたあと、いつもの通り、その裏手に脇道を見つけて入っていく。すると、

……眼下に住宅街と海が広がった。いつの間にか、随分と高台に来ていたのだ。道は唐突に下り階段へ繋がり、とりあえず下りてみる。階段沿いの看板に「SEX!」の大・落書き。そして足元はゴミだらけ。道の両側にはジャングルが茂り、新都心の近くにいることを忘れそうだ。ひたすら下りると、凄まじく大きいガジュマルの木が現われた。その葉陰に……おおっ、御嶽（祖先を祀る拝所）が。どんなに道を広げ、街を広げても、それだけは動かしてはいけないもの、それが沖縄の御嶽だ。（カベルナリア吉田 2013: 51-52）

観光やビジネスとは無縁で、近くに暮らす住民以外は通りそうもない小さな脇道。そこを「ひたすら歩く」とき、裏天久の人びとの普段の生活やその痕跡、土地の歴史や雰囲気がおのずから立ち現れる。

もう一つ、沖縄市（コザ）のフリーマーケットの様子を見てみよう。ここでは米軍基地の遊休地やフェンスを利用して、週末の朝の路上に多くの出店が立ち並ぶ。最近でこそ「ベトナム通り」の名で観光客の一部に知られるようになったが、もともとは周辺住民の生活用に出来た市場である。

吉田はその場に並べられた商品の種類や状態、店の売り子の振舞いや表情、行きかう会話や流れる音楽を、そのつどの感想をはさみながら、こと細かに書き留めている。

道の両側に、ゴザを地面に敷いて品物を並べた「店」が、ビッシリ連なっている！ 間に軽トラやワゴン車も停まりつつ店、店が道の左右にどこまでも続いている。道の先の、奥の奥まで！ そして人の群れ！……「店」の1軒目は、ゴザの上にコーラやファントの古い空き瓶がズラリ。だが売り子のお兄さんはアンニュイな表情だ。……僕もチラリと横目で見るだけで、先に進む。予想外の品物が並び出す！ 傘とスニーカーを並べて売るオバちゃん。フェイクの毛皮コートが、シールズ（米軍基地）のフェンスにズラリ掛かっている。基地のフェンスも、ここではただのディスプレイ用具に過ぎないのだ。……ハス向かいの店は、ド演歌カセットを流し骨董品を販売中。その隣はガスボンベとTシャツを売る店。さらにその隣は沖縄芝居のレコードと時計、壺、ハンドバッグにベビー風呂が並んでいる。商品の組み合わせに脈絡がない！ 売り子のオバアちゃんはサンドウィッチをバカバカ食べている。隣の店はテンビュール枕と輸入缶詰。ハインツのトマト大缶が、ありえないほど凹んでいる。中味は大丈夫か？ とにかくないものが、ない！ ここに天ぶら屋？ カボチャ天ぶらを買うと、売り子オヤジが「ユーキャン イート モア？」と話しかけてくるが、俺は日本人だ！ 隣の売り場から民謡『キジヌマーがチョンチョン』が、凄い音量で流れてくる。（カベルナリア吉田 2013：99-105）

さらに「3万円」の値札のついたクルマ、ジャガイモと譜面台を売る店、頭上には低空飛行の米軍機とその爆音、そしてジーンズと本、CDとDVD、舶来品の缶詰と菓子、冷凍豚肉（業務用）などが目に飛び込んでくる。ディテールにこだわった記述が、この場に溢れるモノと人の混沌としたごちゃまぜ感、細かなルールや規制から自由な開

放感、いたるところにある手づくり感（プリコラージュ）を伝えている。くわえて、「市場はね、自然発生じゃなきゃダメだ」という、店主の一人の言葉も紹介されている。

吉田の本はフィールドワーカーの学術報告ではなく、あくまでもバックパッカー＝旅行作家の手になる読み物である。とはいえ、観光ガイドブックにありがちなステレオタイプなイメージ喚起や興味本位のファンタジーが目立つわけでもない。むしろ、沖縄の日常生活が見せる「その時、その場」の表情を生き生きと描き出しているように思われる。そうした記述は、現地をひたすら歩き、食堂や市場に通い、街路や建物に施された小さな工夫に目を止め、店や宿でのやりとりの機微を肌で感じとることで可能になっている。豊富な体験的記述から、沖縄社会の肌ざわりや雰囲気を読む者にも伝わってくる。

2 日常社会にみる「自治の感覚」

ここで社会学に目を転じると、吉田の紀行文にも通じるエッセイ風の記述を含め、沖縄社会の独特の肌ざわりや雰囲気を生き生きと提示した著作として、岸政彦の『はじめての沖縄』がある（岸 2018 a）。岸は「はじめて沖縄に出会ったときにさかのぼって、沖縄について、個人的な体験から個人的に考えたことを書いてみたい」（岸 2018 a：10）と言うように、沖縄社会への体験的認識から出発し、あらためてその歴史的・社会的意味を探究していく。研究者であること以前の「個人的な体験」にこだわることで得られるものがあるのだろう。岸はごく身近な日常的体験をふり返りながら、沖縄の地で自らが巻き込まれた小さな場の状況や雰囲気を確認していく。

まずは、現地のタクシー運転手とのやりとりをめぐる一連のエピソードがある。「沖縄のタクシーはほんとうに面白い。出張のときの楽しみの一つだ。……話好きのおっちゃんが多いし、なによりマイペースで、勝手に、ラフで、あまり細かい規則を守らない。そして、よくしゃべる」（岸 2018 a：36-37）。ある運転手は紙ナプキンを一枚手に取り、細かく繕っていく。信号待ちを繰り返しているうちに、運転手の手のひらには「美しい

バレリーナ」が出来上がっていた。別の運転手は趣味の話にかこつけて、競艇のあやしげなデータ表をそれとなく売りつけようとする。「六十ぐらいのパンチパーマの、いかにも夜になったら桜坂の Snackbar で泥酔してそうな運転手のおっちゃん」だ（同上書 41）。車内を改造して、後部座席にブーゲンビリヤの花が咲き乱れているタクシーもある。さらに、次のような場面が軽い驚きと微苦笑をもたらす。

二、三年ほど前に友人と一緒に乗ったタクシーで、見栄橋あたりで乗り込んだのだが、崇元寺の辺りで急にそわそわしだすと、他のタクシーに向かって手を振っている。何をしてるんだろうと思って見ていたのだが、突然おじいさんが路肩に車を止めると、「もう降りましょうね」と言った。つまり、降りてください、と言っているのだ。なんで、なんか故障でもしたの、と聞くと、「いや、私もう帰りたいから。ここの通りで待ってたら、すぐ次の車くるから」ということだった。あ、そうなの。今日の仕事もう終わりなの。そう、終わりです。もう家に帰ります。……そうかあ、お疲れ様でした、と言って、私と友人はそこでその車から降りて、路上で次のタクシーを探したのだった。（岸 2018 a: 50-51）

タクシーの運転手が勤務時間中に折り紙をつくって見せたり、自作の競艇データを遠回しに売ろうとしたり、車内に花を育てたり、自分の都合で客を下ろしたりする。勤務規則や市民的規範にとられず、当たり前のように、自分の好きに振まっている。沖縄のタクシーの車内には、本土ではあまり体験できない独特の雰囲気が存在しているのだ。岸はそれを「自治の感覚」と呼ぶ。官僚的な規則や市民的規範にしばられず、「自分たちのことは自分たちです」という感覚のことである。それはときには自分勝手であるが、ときには思いがけない親切にもなるという。

たとえば、岸が調べものをしていた公立図書館でのエピソードがある。冬の寒さのため暖房を入れてもらうようお願いしたところ、施設に暖房はないとのことなので諦めた。ところが、昼食に出

かけて帰ってくると、「小さな小さなストーブが、私が使っていた席の足元に置かれていた。……職員さんに聞くと、すこし笑いながら、私が使っているものであればお貸しします、と答えた」（岸 2018 a: 68-69）。岸は、公立施設の職員が自己判断で私物を貸し出すという「規則違反」が堂々に行われ、そうした親切が当たり前になされることに新鮮な驚きをおぼえる。なぜなら、本土（日本）では官僚的規則による管理が徹底しているため、公共空間での他者への親切行為にはブレーキがかかるからだ。ところが沖縄には細かな規則にとらわれず、「自分で決めて、自分のルールで、他人に優しくすることができる人びと」（同上書 70）が普通にいる。これもまた沖縄の「自治の感覚」の現われである。

さらにもう一つ、那覇の大衆食堂でのささやかな一場面がある。読む者の眼前にありありと浮かんでくる、静かな日常の一コマである。

先日、那覇の泊というところにある、地元客向けの大衆食堂で昼ごはんを食べていたら、横のテーブルで、おじいさんがひとりで、のんびりと泡盛のボトルを置いて、自分で水割りを作りながら、ゆっくりと飲んでいる。土曜日だったが、まだ昼の十二時である。いいなあこういうの、と思って横目で見ていたら、店にもうひとりのおじいが入ってきて、改まった挨拶もせずにおじいさんのテーブルに座り、一言二言会話を交わしたあと、一緒に泡盛の水割りを作って飲んでた。……いいなあ、と思った。（岸 2018 a: 71）

高齢の男性二人が大衆食堂で昼から酒を飲んでいる。それ自体は必ずしも沖縄特有の場面ではない。ただ岸が思わず「いいなあ」と感じたのは、二人のテーブルにたゆたう独特の雰囲気をあじわったからに違いない。お互いに余計な気はつかわず、ゆっくりとのんびりと、それぞれの仕方で好きなように飲んでいる。「友人関係」につきまとう規則や規範的意味にとらわれず、ただ一緒にいて時を過ごしている。こうした何でもない情景にもまた、「自治の感覚」というべき雰囲気が漂っている。

ちなみに、この情景にはある種の「美しさ」があり、「いいなあ」という感情にはある種の快感があるように思われる。一般に、社会空間への身体的関与がもたらす快には、私的な生理的快だけでなく、公的な観念的快（道德規範や一般通念への同調）や共的な感性的快（他者との感情的交流）がある（宮原・藤阪 2012）。偉大な芸術作品や国家的祭典などの非日常的な「大文字の美」に接するとき、観念的快が強くなり、感性的快は弱くなる。それに対して、日常生活のなかにささやかに煌めく「小文字の美」に接するとき、観念的快は弱くなり、感性的快が強くなる。岸がふと目にとめた「おじい」二人の情景にもささやかな「小文字の美」が煌めいていたにちがいない。少なくとも、この場面には日常社会それ自体が帯びる感性的質としての雰囲気存在をあらためて確認することができる（なお、ここでいう「感性的快」の理論をとり入れた研究として、以下を参照のこと。Glow 2017；井出 2016；城野 2015；久保 2015）。

3 「自治の感覚」の歴史的・社会的背景

岸は人びとの生活史の聞きとりや文献資料の読み込みをもとに、沖縄社会の「自治の感覚」の背景にあるものを解明しようとする。それはよく語られがちな「亜熱帯の気候風土」や「沖縄の民族性」ではない。それはもっと最近の歴史的経験、あの凄惨な地上戦とその後の米軍統治をめぐる社会的経験である。

砲弾が飛び交う戦場で着の身着のまま逃げまどう人びとは、通りがかりの他人の畑から芋や野菜をとって食いつないでいく。占領下では住民の自由は制限され、公的な保護や援助も期待できず、米軍の生活物資の横流しや密貿易も盛んに行なわれるようになる³⁾。「沖縄戦の直前から、終戦後しばらくの間、このような、所有権が制限され、あるいは所有関係が曖昧になり、あるいは多少の「違法行為」なら黙認される時期が続いた」（岸

2018 a: 145）。その後の急激な都市化や近代化の時期でも犯罪や暴力がつきまとったが、沖縄の人びとはそうした「私的所有権をはじめとする社会秩序が一時的に解体した」（同上書 144）状況を生き抜きながら、「自分たちのことは自分たちでする」という社会感覚を形成していった。この「お上に頼らない生き方」の感覚こそが、現在もなお沖縄の社会生活の特徴づけている「自治の感覚」のルーツにある。岸は次のように結論している。

沖縄の人びとが、より自由で、自治の感覚にあふれた社会をつくりあげてきたとすれば、その原点には、こうした経験がある。もちろんここに、正確に、科学的に計測された因果関係が存在するとまではいえない。また、そうした経験が、本土の人びとにはまったくなかったということでもない。しかしこのことだけは見える。大規模で凄惨な地上戦と、それに続く二十七年間の米軍統治を経験した沖縄に、本土と異なる社会規範が形成されたとしても、それほどそれは不思議なことではないだろう。（岸 2018 a: 145-146）

ここで「自治の感覚」を「社会規範」と言い換えているのは誤解を招く。なぜなら「自治の感覚」には「そうしなければならない」という規範性よりも「そうしてしまう」という事実性の方が強いはずだからである。それはあくまでも規範以前の感覚として、相互行為状況をふくむ社会空間の雰囲気の一つとみなされるべきだろう。

ただ、この点を確認すれば、「自治の感覚」の形成要因として沖縄の地上戦と米軍統治を特定することには十分な説得力がありそうだ。すでに指摘したように、他人の畑から芋や野菜をとることや米軍物資を横流しすることは、社会秩序の解体という過酷な状況を生き抜くために欠かせない行動でもある。それが明確な社会規範として正当化されなくても、「お上に頼らず」「自分たちのこと

3) 真藤順丈の小説『宝島』（2018）は、米軍基地から生活物資を奪い取る「戦果アギヤー」の活躍を生き生きと描き出している。宮森小学校米軍機墜落事件（1959 年）やコザ騒動（1970 年）をはじめ、米軍統治下の社会的経験をよりよく「知る」ためにも欠かせない一冊である。

は自分たちです」という感覚に支えられていただろうことは容易に想像がつく。実際、地上戦を経験した人びとの語りや体験談のなかに、「自治の感覚」的なものの原型が姿をみせている。

たとえば、本島北部の山中に避難した当時 14 歳だった男性による、母親と小さな弟をめぐる体験談がある。

やんばるの山のなかの、即席でつくられた粗末な避難小屋で、泣いている一歳の小さな子どもを殺せと言われた母親が、最後にせめておいしい果物を食べさせようと、ヤマモモの木に登って実を採ろうとする。しかし母親は何も持たずに降りてきた。なぜ殺さないのか、とまわりの人びとに詰め寄られた母親はこう答える。「いやあ、もうこんなところで、飯も食べさせないで殺すわけにはいかないんだよ。連れて帰ってきたよ」。母親がヤマモモを採るために登った木には、ハブがいた。とぐろを巻いているそのハブを見て、母親は子どもを殺さずに、連れて帰ってきた。(岸 2018 a: 131)

これは岸による要約だが、母親がこの極限的状况のもとで、周囲からの規範的圧力に抗して「自分たちのことは自分たちです」ふるまいを示したことは確かだろう。

さらに語り手本人の言葉に注目すると、母親は「もうみんなが言うから仕方がないなあ」と一度は諦めている。ところが、ヤマモモの木から降りたときには「あれみてごらんハブだよ、大変だね」と、我に返ったような様子を見せる。また、(戻ってきた母親と子どもに対して)「みんな納得はしないけども、まあ了解はしてるわけだよ。それで(弟は)今まで(七一歳まで)生き延びてるんだよ」とも語っているように、まわりの人びとも母親の姿勢を結局は受け入れたことがわかる(同上書 122-123)。語りの細部に注目すると、「自分たちのことは自分たちです」という感覚がより鮮明に浮かび上がってくる⁴⁾。

また、同じ男性がその後、自分自身の窮地を生き延びた体験談がある。

やんばるの森のなかに隠れているときにハブに噛まれ、その直後に米軍の捕虜になって、収容所に収容された。軍医から膝下を切断されそうになったが、収容所から逃げ出し、海岸の洞窟に隠れて、自分の爪で足の皮膚を破って自分で血を出して、自力で回復したのだった。「それで養生してね。今日の私の足があるわけよ。」(岸 2018 a: 134)

そもそもこの出来事の発端は自力での食料調達だった。「手ぶらでみんな捕虜になっていくから、(避難所に)残してるもんがたくさんあるでしょ。……何かないかなって、探しに行く途中に、私はハブに左足をかまれた。だんだんこう腫れてきたんだよ」。そこで自ら米軍の捕虜になり、診療所に連れていかれた。「英語がわからんでしょ。『アメリカ軍に鉄砲で撃たれた』って言ってやった(笑)。……手真似、足真似やった。」ここにはアメリカの軍医相手に一芝居打つ逞しさも見える。「でも、米軍の医者がこれ見て、お前これは違うと。『お前はハブにやられたんだよ。明日ひざ下を切断する』と言うわけ」。それだけは真っ平ごめんだというので、「私は夜中、その診療所を逃げ出したんだ。……洞窟みたいなのがいくつかあるんだよ。そこに隠れて、自分でね、海水で(洗った)。……爪がこんなに伸びとるわけだから、(膿を出すために)自分の爪で皮膚を切って、モズクを塗って、血を出したら、三日目くらいから痛みも少しずつ良くなって、だんだん腫れがなくなった」(同上書 131-133)。……こうした語り手の言葉からは「お上に頼らず」という社会感覚の極限的な形が鮮やかに示されている。

以上の戦場の体験談に示された苛酷な社会感覚は現在では想像もつかないが、それでもなお現代沖縄に見られる「自治の感覚」との同型性を感じさせる。つまり、先にふれたタクシーや図書館、大衆食堂の場面をはじめ、現在の沖縄で感じられ

4) 語り手によれば、避難所近辺に日本兵はおらず、子どもを殺すよう強要したのは「隣りの人」や「周囲の人」だった。同様の状況のもとで、日本の軍人が命令(強要)したケースがあったこともよく知られている。

る社会的雰囲気は、よりつつましく穏やかな形ではあれ、戦場経験者の体験談が示す社会的雰囲気と明らかに連続しているのである。こうした感性的次元での連続性を通して、岸の主張は生き生きとした説得力を帯びてくる。

すでに述べたように、岸は沖縄的な「自治の感覚」について、「亜熱帯や『民族的 DNA』に還元するような本質主義的な語り方」を避け、できるだけ「世俗的に語る」ことの必要性を説く（岸 2018 a: 249）。「世俗的に語る」というのは「沖縄に生まれ育ったそれぞれの個人がその歴史を経験しながら生きてきた人生から考える」（同上書: 142）ということであり、あくまでも人びとの生活経験の現実在即して語るということだろう。「自治の感覚」を沖縄の気候風土や民族性に由来するユニークな本質とみなすのではなく、いまなお記憶に新しい地上戦と占領統治下の経験、とりわけ私的所有権を含む社会秩序の一時的解体の産物として理解しようということである。

冒頭に紹介した吉田の紀行文に戻れば、そこでもやはり「自治の感覚」的なものが微に入り細にわたる体感的記述のうちに浮かび上がっていたことに気づく。それは軽い驚きや可笑しみをともなう自由な雰囲気の魅力として描かれるが、とくに「本質主義的な語り」が目立つわけでもない。ただ、読み物としての紀行文が、沖縄の独自性の歴史的・社会的背景の分析にまでは踏み込めないのも事実である。その点で、岸の『はじめての沖縄』は、沖縄の社会生活のもつ独自の雰囲気を重視した上で、あらためてその歴史的・社会的背景の分析を進めた貴重な試みといえる。

4 「自治の感覚」の実在性

あらためて注目したいのは、岸が「自治の感覚」の「実在性」をくりかえし強調していることである。「自治の感覚」は単なるフィクションやファンタジーの産物ではない。それは「単なる植民地主義的なラベリングやカテゴリー化ばかりではなく、実際に存在するもの」（岸 2018 a: 143）と考えるべきなのだ。たしかに、沖縄的なものへの過剰な好奇心や理想視という「植民地主義的な眼差し」はつねに疑う必要がある。それでもなお

「事実としてそこにあるもの」（同上書 78）は実在する。「私は、沖縄的なものは、『ほんとうにある』と思っている。あるいは、もっと正確に言えば、ほんとうにあるのだということを私自身が背負わないと、沖縄という場所に立ち向かうことができないような気がしている」（同上書 187）。これは微妙な言い方だが、岸は認識の身体性・社会性を欠く素朴実在論への退行を防ぎつつ、言説偏重の対話的構築主義を批判しているのだ。その立場は、一言でいえば、人びとの語りのうちに人間的経験としての「事実」を聞きとることは可能だ（もしそうでなければ、当事者＝語り手との共同作業である研究それ自体が無意味になる）ということだろう。

ここでは「約束としての実在論」（岸 2018 b）の議論に深入りすることはできないが、それに関連する論点として、新現象学が主張する「雰囲気の実在性」を指摘しておきたい。G. ベーメが示したように、雰囲気はそれを経験する主観（身体）がなければ存在しないという意味で、モノのような客観的な実在性（事実性）をもたない。しかし他方で、「雰囲気は、主観的なものでありながら、他の人々と分かち合うことができ、それに関して他の人々と理解し合うことができる」（Böhme 1995=2006: 171）。雰囲気は「主観と客観との間にある何か」（同上書 14）であり、それとして独自の実在性（事実性）をもっている。それは何よりも身体的参加と感性的関与を通して把握される。

「自治の感覚」もまた「人と人とのコミュニケーションにおける雰囲気」としての実在性（事実性）をもち、その場への身体的参加と感性的関与を通して把握される。『はじめての沖縄』に登場する数々のエピソードや体験談には、人びとが「何を話したか」「何を行ったか」を示す客観的事実だけでなく、それを「どのように話したか」「どのように行ったか」を示す雰囲気的事実もまた豊富に含まれている。すでに見てきた戦場経験者の体験談でいえば、岸の手になる要約が客観的事実中心にならざるをえないのに対し、語り手本人の言葉遣い（表現）からはさまざまな雰囲気的事実も浮かび上がってくる。同時に、現代沖縄のタクシーや図書館や食堂でのエピソードみられる

ように、岸自身が体験の語り手となる場合には、その記述にやはり多くの雰囲気的事実が含まれてくる。それは「急にそわそわしだす」「小さな小さなストーブ」「すこし笑いながら」「のんびりと泡盛のボトルを置いて」「改まった挨拶もせずに」「言葉を突きつけられる」「そこらじゅうにある」といった表現からも明らかだろう。岸のエッセイ風の記述が通常の学術報告にはない迫真力をもつのは、それが聞き取り調査をはじめフィールドワークの場合への身体的参加と感性的関与を大切に、客観的事実の背景にある雰囲気的事実にまで踏み込んでいるからにちがいない。

ただ、岸の考察のなかで、「自治の感覚」の形成における、沖縄戦以前の長い歴史からの影響が徹底的に否定されている点は疑問符がつく。たしかに、先の沖縄戦や占領統治のもつリアルな重みは疑いえない。それを説得的に示したのが『はじめての沖縄』の功績である。とはいえ、それ以外の歴史的経験を無視してよいとも思われない。たとえば、民俗学者の谷川健一は沖縄の長い「歴史の光景」を体感しながら、次のように述べている。

私が沖縄で解放感と安らぎをおぼえるのは、本土の地方の隅々まで刻印されている権力の影が、沖縄には落ちていないせいでもある。……仏教の導入はいたって希薄であり……威圧するような大伽藍の姿、それは国家権力と固く結びついた歴史の光景でもあるが、その歴史を体験していない沖縄……。 (谷川 1996 : 55)。

同様に、芸術家の岡本太郎は、沖縄の御嶽を目の前にして、「何もないこと」の眩暈⁵⁾について語っている (岡本 1996 : 39)。

沖縄における大規模な統治権力の希薄さの反面には、ユニークな祭祀や芸能をともなう集落自治の伝統が指摘できるだろう。この集落自治の伝統が沖縄戦や占領統治期の経験を介して現代の「自

治の感覚」に影響している可能性も否定できない⁵⁾。少なくとも、「自治の感覚」の背景として、沖縄戦以前の近代史やそれ以前の歴史経験、さらには民俗学的・考古学的生活古層も何らかの影響を及ぼしている可能性も考える必要がある。そうした探究が植民地主義的な本質主義を呼び込むことへの警戒は理解できるが、歴史を遠く遡ってもなお、人びとの生活経験の現実に即した「世俗的な語り」は可能はずだ。

いずれにしても、『はじめての沖縄』の新鮮さは「自治の感覚」の実在性とその背景をめぐる、感性的関与をともなう社会学的考察にある。とはいえ、岸は沖縄の独自性として「自治の感覚」だけを挙げているのではない。そうすると「自由で気楽な暮らし」あるいは「抵抗する正義の民衆」といった沖縄の美点だけを称揚する言説と混同されかねないからだ (岸 2018 a : 75-76)。そこで、本島北部の延々と続くシャッター街の、目に焼きつくような貧困の風景や、何気ない会話の一端に浮かび上がる本土との間の非対称的な境界線の存在も、岸自身の体験や住民からの聞き取りをもとに考察されている。とりわけ、「腐れナイチャー」という言葉に現れる、本土 (日本人) に対する「拒否の感覚」の手ごたえが生々しく語られている。

沖縄の人びとの、優しさや穏やかさに、何かのきっかけで亀裂が入り、その瞬間から急に、この言葉を突きつけられることがある。それが政治的に正しいかどうかはまた別の話だ。右だろうが左だろうが、ナイチャーはナイチャーなのだ。そしてウチナンチュはウチナンチュである。そういうことを、思い知らされる瞬間が来るのだ。私たちはそんなとき、心から驚き、狼狽する。(岸 2018 a : 218)

この「拒否の感覚」も沖縄における社会空間の雰囲気の一つにちがいない。それは普段は隠れていても確かに実在し、いつでも社会生活の表面に

5) 「あしび」(遊び) はうたや踊りなどの芸能であり、人びとの自治的活動の原型でもある。沖縄社会の感性的質の探究には「あしび」の歴史を視野に入れる必要があるようだ。それは沖縄をこえた普遍的意義をもつと思われる (宮原 2018)。

浮上する可能性をもっている。その背景にはやはり凄惨な沖縄戦と米軍による占領統治、そして現在にいたる基地問題や本土による政治的・経済的支配の経験がある。さらには、明治政府による「琉球処分」や薩摩藩（徳川幕府）の侵攻に遡る支配・抑圧の歴史的経験もあるはずだ。「人びとの暮らしや日常のなかに根ざしている、日本に対する違和感や抵抗や「拒否の感覚」を丁寧にするあげろ」（岸 2018 a: 249）ことが、沖縄の社会空間をめぐる社会学的研究の重要な課題であることはいうまでもない。

5 再び沖縄を歩く、感じる

旅行や仕事で沖縄を訪れた人なら誰でも気づくように、那覇の街はここ 20 年ほどの間、大きく変貌した。天久新都心やバスターミナル再開発やホテルやオフィス・ビルの建設がいたるところで進み、本土の大都市とあまり変わらない外観を呈している。90 年代にはまだあちこちの公共施設や路地裏に残っていた古き良き沖縄は消え去りつつある。かつて自身が沖縄病だったという岸が、近年の変化を見届けながらつぶやく言葉が印象にのこる。

沖縄は、なくなる。……私はおもろまちを歩いている、南風原のイオンモールで買い物をしていても、久茂地のビジネスホテルに泊まっても、どこで何をしても、沖縄を感じるのである。風や、光や、匂いのなかに。「ほんとうの沖縄」は、どこにあるのか誰にもわからない。でも、「ふつうの沖縄」なら、そこらじゅうにある。（岸 2018 a: 186）

沖縄を感じる。沖縄の観念（「ほんとうの沖縄」）ではなく現実のありよう（「ふつうの沖縄」）に肌でふれること。それは沖縄の社会空間の感性的質をあげろ／あげろされることにつながる。沖縄の社会空間には「自治の感覚」や「拒否の感覚」などの独特の雰囲気がある。それは「風や、光や、匂いのなか」だけでなく、人びとと事物が織りなす社会空間のただなかに存

在しているはずである。

『はじめての沖縄』を読んでしばらくした頃、筆者はあらためて沖縄を歩きたくなり、とりあえず何度も行って土地勘のある那覇に行くことにした（2019 年 5 月）。三日間という短い滞在だったが、路線バスで訪れた沖縄市（コザ）を含め、できるだけ街路を歩き、商店や食堂や公共施設に立ち寄りながら、あらためて「ふつうの沖縄」にふれる機会を得たいと思った。その時のフィールドウォーク体験の一端を書き留めておきたい。

コザではかつて「黒人街」とよばれて繁栄した銀天街から歩き始めた。わずかな店舗や福祉事務所をのこし、アーケード街も路地裏も廃墟のようにになっている。たまたま住民らしき人と行き会ったり、一人うろうろしている自分が気恥ずかしい。そそくさと大通りに戻り、いくつもの建物の壁一杯に描かれた、カラフルで陽気な壁画を眺めた。この場所を歴史遺産として生かそうとする姿勢が辺りの雰囲気をもくしている。その後、米軍嘉手納基地の手前、ゲート通りや近辺を歩いてまわった。かつては那覇以上に栄えたという商店街もかなりシャッター街化している。しかし、アーケードの高さやデザイン性、縦横に入り組んだ街区にすまなく広がる建造物の密度には、かつての基地経済の繁栄を実感させられた。

胡屋十字路では右翼の街宣車が連なり、軍歌の轟音を流していた。暴力の気配に一瞬身のすくむ思いがしたが、道行く人びとはとくに身構え苛立つ様子もない。ミュージックタウンのオープン・フロアで一休みし、エイサーや沖縄音楽のポスターやブックレットに眼をとめながら、暴力の気配と隣り合わせの平和な日常をあげろ。翌日、那覇の新都心でも軍歌の轟音に襲われたので、なお忘れがたい体験となった。

那覇ではちょっとした出来事に遭遇した。仮設移転を控えた古い牧志公設市場で、ビール片手にソーキそばと島らっきょうを味わい、平和通りを壺屋方面へ歩いていた時である。突然、ラジオ体操の音楽が鳴り始める

と、商店街の人たちがそれぞれの店頭に出てきた。あたりを見回すと、こちらの店の人はしっかり正面を向き、あちらの店の人は少し照れながら、ラジオ体操をしている。接客を続けている店もあり、全員参加でもないようだ。時計を見ると午後4時である。「営業中に？」と軽く驚きながらも「これもいいなあ」と頬がゆるみ、『はじめての沖縄』のタクシーのエピソードを思い出していた。今ふりかえると、このラジオ体操にも「小文字の美」が煌めいていたのかもしれない。ちょっとした出来事をきっかけに、沖縄の「自治の感覚」の一側面を確認することができたように思う。

さらに、那覇近郊の精神科クリニックで、午前中のデイケア・セッションに参加見学する機会にも恵まれた。細かなルールにとらわれず、誰がスタッフで誰がクライアントか見分けがつかないような、ゆるい集まりの場の雰囲気になれることができた。物事をつきつめず、よい意味で脱力したテーゲーな集まりで、ここにもまた「自治の感覚」の穏やかな現れがあるように思われた⁶⁾。

最後に、これまでの考察を踏まえて、社会空間の雰囲気をめぐる社会学的研究の可能性を確認しておきたい。冒頭でも述べたように、雰囲気の認識には一人一人の身体を通した感性的関与が不可欠である。そうした感性的関与は「そのとき、その場」の小さな空間から始まり、時空をずらした反復を通して、たとえば沖縄のような、より広域的・歴史的な社会空間に及ぶ可能性をもっている。社会空間の雰囲気はたんなる主観的気分やファンタジーではなく、イメージや言説の構築物でもない、確かな肌ざわりをもって存在している。

同時にそれは、当の社会のもつ永遠不変の「本質」の現れではなく、人びとの生活経験を通して形成されてきた歴史的現象である。そのため社会

空間の感性的質への着目は、その社会的意味や歴史的背景をめぐる経験的研究を必然的に要請することになる。それは人間の経験をベースにした社会学的研究にとって重要な意味をもつのである。

参考文献

- Böhme, Gernot, 1995. *Atmosphäre: Essays zur neuen Ästhetik* (=2006, 梶谷真司・斎藤修・野村文宏訳『雰囲気的美学』晃洋書房).
- Böhme, Gernot, 2017. *Critique of Aesthetic Capitalism*. Mimesis International.
- Frisby, David, 1981. *Sociological Impressionism: A Reassessment of Georg Simmel's Social Theory*. Heine-mann.
- 藤阪新吾, 2018. 「場所の予感」『暮らしのデザイン』生涯学習かめおか財団.
- Glow, Johanson and Hilary, 2017. 'Wrestling with beauty: Putting the aesthetic into arts evaluation,' *Applied Practice: Evidence and Impact in Theatre, Music and Art* (M. Reason and N. Rowe eds.). Bloomsbury Publishing.
- 井出里咲子, 2016. 「スモールトークとバンパースティックカー 公共の場におけることばの感性的快をめぐって」村田和代・井出里咲子編『雑談の美学』ひつじ書房.
- 城野充, 2015. 「美学としてのトゥソフカーソ連を崩壊させた美的共同体」『追手門学院大学社会学部紀要』9: 27-38.
- カベルナリア吉田, 2013. 『さらにひたすら歩いた 沖縄みちばた紀行』彩流社.
- 岸政彦, 2018 a. 『はじめての沖縄』新曜社.
- 岸政彦, 2018 b. 『マンガーと手榴弾—生活史の理論』勁草書房.
- 木下寛子, 2017. 「雰囲気が言葉になるとき—小学校の日々から始まる雰囲気の解釈学的現象学」『質的心理学研究』16: 191-210.
- 久保正秋, 2015. 「意味生成としての「スポーツ運動」体験の構造」『体育学研究』60(2): 617-633.
- 宮原浩二郎・藤阪新吾, 2012. 『社会美学への招待—感性による社会探究』ミネルヴァ書房.
- 宮原浩二郎, 2018. 社会空間の感性的質について (2)

6) この場を借りて、学生時代からの古き友人である精神科医の中嶋聡氏（なかまクリニック院長）、スタッフとクライアントの皆様に感謝したい。なお、中嶋氏からは、本稿の「自治（self-government）の感覚」は語感が強すぎ、「自律（autonomy）の感覚」のほうがしっくりくるのではないかと指摘をうけた。つねに外部勢力からの脅威にさらされてきた沖縄の長い歴史をふり返るとき、この指摘は本質的な問題についているように思う。今後の課題としたい。

ー遊びの運動性とシラーの社会美学』『関西学院大学社会学部紀要』128 : 131-140.

Miyahara, Kojiro, 2014. Exploring Social Aesthetics : Aesthetic Appreciation as a Method for Qualitative Sociology and Social Research,' *International Journal of Japanese Sociology* 23(1) : 63-79.

McNally, Danny. 2015. 'Comforting Others : Sociality and the Ethical Aesthetics of Being-Together.,' *Geographical Aesthetics* (H. Hawkins and E. Straughan eds.),

Routledge.

岡本太郎, 1996. 『沖縄文化論－忘れられた日本』中公文庫.

Saito, Yuriko, 2017. 'The Ethical Dimensions of Aesthetic Engagement,' *Contemporary Aesthetics* 6(2) : 19-29.

真藤順丈, 2018. 『宝島』講談社.

谷川健一, 1996. 『沖縄－その危機と神々』講談社学術文庫.

On the Aesthetic Quality of Social Spaces (4): “Sense of Self-government” in Okinawa

ABSTRACT

This paper discusses the “sense of self-government” as an important aesthetic quality of social spaces in Okinawa.

Drawing on a recent sociological ethnography of Okinawan society by Masahiko Kishi titled *Hajimete no Okinawa* (Okinawa for the First Time), this paper investigates the “sense of self-government” perceived in everyday social interactions in Okinawa. It examines the crucial effects of the 1945 ground battles (and social disorganization under American occupation) on the formation of a uniquely Okinawan “sense of self-government.”

An intermediate discussion studies the ontological status of the “sense of self-government” as a type of social atmosphere. Just as an atmosphere is generally not a product of subjective feelings or merely a social construction of discourses, so is the “sense of self-government.” To quote G. Böhme, the “sense of self-government” as a social atmosphere is a “quasi-objective” reality, which is firmly rooted in the real historical experiences of Okinawan people.

The last section presents the writer’s recent travel diary in Naha and Koza. It represents an aesthetic engagement with contemporary social spaces in Okinawa. This autoethnographic writing also provides some evidence for the real existence of “sense of self-government” in Okinawa.

Key Words: atmosphere, sense of self-government, Okinawa, social disorganization